

【特集】

焼け跡に手を差しのべて 一戦後復興と救済の軌跡

戦争被害者を救った 横浜の人々



ご自由にお持ちください

【展示余話】

鯨が泳いだ博覧会 一復興記念横浜大博覧会一

【資料紹介】

横浜電気鉄道『住宅地案内』

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第27号 2016(平成28)年10月22日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
題字/ロゴ/高橋健介 印刷/製本/神奈川新聞社 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内



焼け跡に手を差しのべて 一戦後復興と救済の軌跡

昭和20(1945)年8月の終戦後、多くの人々が困難な状況のなかで生活することを強いられました。特に引揚者や戦災者、戦争孤児など弱い立場の人々が置かれた状況は過酷でした。本展示では、戦後横浜の復興への軌跡とともに、戦争被害者に対して救済の手を差しのべた横浜の人々の取り組みについて、当時の資料から紹介します。

【会期】2016(平成28)年10月22日(土)
～2017(平成29)年1月15日(日)

【図録】『焼け跡に手を差しのべて一戦後復興と救済の軌跡』
横浜都市発展記念館/編

寄贈・寄託資料の紹介

平成28年3月から9月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
ひらがなタイプライター(昭和40年代)他	9	磯部伸樹
滝沢晴子家資料	27	滝沢晴子
氷川丸ランチメニュー(昭和33年)他	11	岡部隆一郎
中嶋宏子家資料	49	中嶋宏子
南関東地域開発状況調査メモ一式(昭和54年)他	67	座間泰雄
軍事郵便(昭和13年)他	2	小松富一
寄託資料名	点数	寄託者
『市民の生活図集』(昭和45年)	1	石黒徹

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

- 刊行物
- 『横浜・山下公園 一海辺に刻まれた街の記憶』①
横浜都市発展記念館/編 定価880円+税
 - 『ハマを駆ける クルマが広げた人の交流』②
横浜開港資料館・横浜都市発展記念館/編 定価1000円+税
 - 『時計屋さんの昭和日記 一青年のみた戦中戦後の横浜』③
横浜都市発展記念館/編 定価900円+税
- 『目で見える「都市横浜」のあゆみ』
横浜都市発展記念館/編 定価1,239円+税

DVD
『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ
定価各1,429円+税
第1巻・港とまちづくり 第2巻・都市の交通 第3巻・子どもたち



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時
企画展開催中の水曜日は午後7時まで
(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間
企画展 一般300円 小・中学生150円
(企画展の入館券で常設展もご覧いただけます。)
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

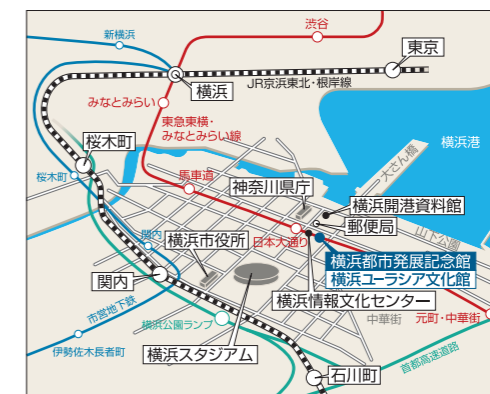
■それ以外の期間

常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

- 毎週土曜日は小・中・高校生無料
- 「濱ともカード」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分
- あかいづつバス「日本大通り」下車徒歩1分

●表紙写真

平野恒と高風子保育園の園児達(昭和28年(福)白峰会所蔵)

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記

秋の企画展では、これまで語られることの少なかった横浜の戦後復興の一面を紹介します。戦争が終わっても市民の苦しみは簡単に終わるものではありません。弱者へのまなざしに焦点をあてた企画展「焼け跡に手を差しのべて」。多くの方のご来場をお待ちしております。(青)

◎次号発行予定 平成29年4月下旬



焼け跡に手を差し伸べた――戦後復興と救済の軌跡――

戦争被害者を救った 横浜の人々

昭和20年(1945)の敗戦後、厳しい食糧難や住宅難が起こり、多くの人々が困難な状況のなかで生活する事を強いられた。特に引揚者や戦災者、戦争孤児など、弱い立場に置

かれた人々の状況は過酷であり、このような問題に対し、行政も様々な手を講じたが、激しい戦争被害を受けた横浜では、保護の手が行き届かず、困窮の縁に立たされた人々の救済が急務となっていた。このような状況のなか、どのような人々が、戦争被害者に救いの手を差し伸べたのかについて解説していきたい。

引揚者の保護を担った 「総合社会事業 金沢郷」

敗戦によって、それまで日本が統治をしていた植民地などに移住していた人々は、日本に帰還することを余儀なくされた。神奈川県浦賀港は引揚港の一つで、昭和22年(1947)までに復員軍人を含む56万人もの人々が上陸している。このうち、国内に定着先のない引揚者は住居や食料がない状況に追い込まれていた。こうした人々の保護のために立ち上がったのが、私設社会事業懇話会の有志連である。神奈川県匡済会を中心とした同会所属の11の団体が力を結集して引揚者保護の方法を模索した結果、

金沢区の町屋町と平潟町にあった旧海軍航空技術廠工員宿舎を無償で借り受ける事が決まり、「総合社会事業 金沢郷」(1)と名付けて昭和20年(1945)11月より保護を開始した。金沢郷は「総合社会事業」であることが目指され、医療施設が設置されたほか乳幼児、母子、父子家庭、高齢者、障害者、戦争孤児などの保護を各参加団体が得意分野に応じて担当する体制が整えられていた。この取り組みは資金難等の問題から翌年11月にその役割を恩賜財団同胞援護会神奈川県支部に移譲することになるが、敗戦により大きな痛手を受けた社会事業団体が再度結束する契機となったことから、「戦後神奈川県社会福祉事業の原点」と評価されている。

戦争孤児や浮浪児の保護を担った人々

戦争により親を失った戦争孤児は、神奈川県では500名ほど存在し、浮浪児となって荒んだ生活を送る者も多かった。このような孤児達の保護の一翼

を担ったのが平野恒による高風子供園(2)である。平野は戦前から児童福祉事業に携わってきた人物であるが、空襲によって全ての施設を焼失する被害を受け、いったんは活動の継続を断念する。しかし、戦後すぐに施設の再建に取り組み、中村愛児園を開設したほか、前述の金沢郷で母子寮を運営するなど、積極的な活動を展開した。このような活動の中で横浜の街に多く存在した戦争孤児の保護を思い立ち、昭和21年(1946)3月に高風子供園が中区本牧元町に開設されることになった。同園内には母子寮が併設されたほか、現横浜女子短期大学の前身となる保母養成施設があり、多岐にわたる活動に取り組んでいた。同園は現在でも高風子供園・保育園として平野が設立した社会福祉法人白峰会の運営のもとで活動を継続している。

平野の活動の他に、戦争孤児を保護した施設としてボーイズホーム(3)があげられる。本施設は日本厚生団が設立した施設で、昭和21年(1946)12月に中区目ノ出町子神社境内に建てられた。同ホームでは、音楽教育や押し花制作など町の聖母愛児園(5)である。同園は昭和21年(1946)に社団法人大和奉仕会(現社会福祉法人聖母会)が運営する横浜一般病院の一角で「混血児」の捨て子を保護したことが契機となって設立された施設で、昭和27年(1952)には約140人の孤児達が保護されていた。同園には当時の日本の生活水準を超えた近代的な設備が整備されており、乳幼児養育の専門家が常時園児達の保護を担うなど、快適な環境が整えられていた。また、成長した園児達の養子縁組にも積極的に取り組み、多くの孤児達に家庭を与えるために尽力をしていた。現在でも、海外に養子に出た元園児達が自らの出自について同園に問合せることがあり、同園では当時の資料から情報を提供する役割を果たしている。

「混血児」の孤児を保護した 聖母愛児園

戦後、多くの占領軍が駐留した横浜では、兵士と日本人女性との間に多くの「混血児」が誕生することになった。彼らのなかには望まれない妊娠によって誕生した者も多く、町に棄てられて死亡する者も多数存在したため、これらの子ども達の保護が大きな社会問題となっていた。神奈川県では昭和27年(1952)の段階で276名の「混血児」の孤児が施設に保護されていたが、このうち最も多くの孤児達を保護したのが、中区山手



③ボーイズホームの子ども達 昭和30年 子どもの園所蔵



②平野恒(画面中央の女性)と高風子供園の園児達 昭和24年 (福)白峰会所蔵



①引揚者の保護を担った金沢郷 平野恒子著「児童福祉とわが人生」所載 当館所蔵



④光風園の園児達 昭和30年代 (福)光風会所蔵



⑤近代的な設備が整えられた聖母愛児園 聖母愛児園所蔵

このように、戦後の横浜では、戦争の被害にあった人々に対して多くの民間の社会福祉事業団体が救済の手を差しのべた。今回紹介をした団体のほかにも、乳幼児の保護を担った乳児保護協会や、海外から救済物資を送ったLARAやCAREなどの組織が献身的な活動を展開している。当然ながらすべての人々に保護の手が行き届いたわけではないが、これらの団体の活動は、横浜の戦後史において記憶されるべき取り組みであるといえるだろう。

(西村 健)

※本文中に現在では不適切な用語があるが、歴史的用語として使用する。

鯨が泳いだ博覧会 — 復興記念横浜大博覧会 —



図1 海上からみた博覧会場
昭和10年 当館所蔵絵葉書

企画展「横浜・山下公園」(4月16日〜7月3日)では、関東大震災をきっかけに誕生した山下公園の歴史を、戦前戦後のさまざまなエピソードをもとに紹介したが、来館者アンケートで好評だったのが、昭和10(1935)年に山下公園で開催された復興記念横浜大博覧会のコーナーであった。

モダンデザインの博覧会

復興記念横浜大博覧会は、関東大震災からの復興を記念し、さらなる経済の振興を図るために開催されたもので、会期中に延べ320万人を超える来場者があった。当時の横浜市の人口が70万人弱であったから、人口の4倍以上の人びとが来場したことになる。大変なぎわいを見せた博覧会であった。

図1は海上からみた博覧会場風景で、左奥には屋上増築後のホテル・ニューグランドが見え

る。中央の黄色い構造物が公園入口に設けられた正門で、海側に突き出た半円形のバルコニー部分にそびえるのが、高さ30mの迎賓館である。

生きた鯨のパヴィリオン

絵葉書に付けられた色は決して誇張されたものではなく、博覧会の公式記録である『復興記念横浜大博覧会誌』(昭和11年)によると、各パヴィリオンは、実際にこのような鮮やかな色で彩られていた。正門は「壁面を朱に、翼部を黄と金の縞に塗って群青の陰影を伏した」とあり、造形は「蒼空を翔る大鷲を連想」させる「構成派的」な手法を用いたとしている。会場のランドマークである迎賓館も、「白を基調として、塔の前面、背面は総硝子、側面は青條と乳白色に塗り分け」られていた。

これらの施設の設計は横浜市建築課がおこなっており、設計方針に示されているように「自由、明快、簡素にして、真に新

ダンデザインからはほど遠い、昔ながらの見世物小屋の雰囲気を残した施設であった。実際、パヴィリオンよりも小屋と表現した方が、この雰囲気には似つかわしい。

図4および図5は、展示では紹介しなかった写真であるが、図4は内部の栈敷を写したもので、海上の生け簀の様子がわかる。人びとの視線の先に鯨が泳いでいるのであろう。図5は一連の写真に含まれていたもので、鯨を運搬してきた漁船であろうか。生鯨館の細部がわかる写真は公式記録にもなく、いずれも貴重な資料である。



図2 「復興記念横浜大博覧会鳥瞰図」(部分)
昭和10年 当館所蔵

生鯨館悲話

しかし、生きたまま鯨を横浜まで運搬することはきわめて困難な作業であった。前出の『博覧会誌』によると、会期当初は生鯨館に鯨の姿はなく、3週間近く経った4月14日早朝に、よ

うやく紀州沖から鯨3頭が到着した。鯨見たさに人びとが殺到するさまを、当時の新聞は「人が泡吹く生鯨館!」と伝えていた(『横浜貿易新報』昭和10年4月15日)。

このなかの1頭の牝鯨は生け簀のなかで子鯨を出産するが、

出産後、息も絶えんばかりの状態になっていたので、漁師たちが生け簀から外に出した瞬間、綱を断ち切って逃げ出したという。残りの2頭も17日には死んでしまった。

その後、生鯨館は一時閉鎖となり、次に鯨を見ることができたのは、会期終了まで1週間に迫った5月16日であった。このときは9頭の鯨が到着するが、早々に7頭が死に、残り2頭も18日の夜に死んでしまった。最終的に生鯨館がオープンしていたのはわずか5日間であったが、そのわずかな期間に4万6千人も

の来場者を集めたという。とはいえ、見世物として連れてこられた鯨のほとんどが数日のうちに死んでいることを思えば、田中祥夫氏が『ヨコハマ公園物語』で指摘するように、生鯨館の話は山下公園の「人気話ではなく、哀話」である。かつて船溜まりのあった場所は、現在は沈床花壇となっているが、この場所に来たときには海辺に目を向けて、少しだけ鯨のことを思いを馳せてみてほしい。

(青木 祐介)



図3 生鯨館 昭和10年 内山登貴子氏所蔵



図4 生鯨館の栈敷 昭和10年 内山登貴子氏所蔵



図5 海上の漁船 昭和10年 内山登貴子氏所蔵



表紙

横浜電気鉄道

『住宅地案内』

横浜市の中・西・南・神奈川・磯子区などの中心市街地には、かつて路面電車が走っていた。1904（明治37）年に開業して1972（昭和47）年に廃止されるまでの約70年間、「市民の足」と親しまれ、都市内の交通機関としての重要な役割を果たした。その運営者は、1921（大正10）年の市営化によって横浜市（戦前は電気局、戦後は交通局）となるが、それ以前の17年間は横浜電気鉄道という民間企業だった。ただ、「横浜市電」に関

する資料は多く残されているが、横浜電気鉄道については残されている資料が極めて少ない。筆者がこれまでに確認できた主なものは右の表にあるだけである。

本ページでは、そのうち当館で所蔵している表題の資料について、紹介をしたいと思う。これは横浜電気鉄道が発行したパンフレットである。冒頭の文章と付図を除くと、全て写真とその説明文とで構成されている。表紙と付図を含め、主な写真をここに掲載する。

いやや難解な文章だが、交通条件と自然環境にめぐまれたこの土地が大きな財産になるとアピールをしている。住宅地の地図が付され、本文中にはその全景と建物の写真の他、風光明媚さといふフラの充実を強調するためか、本牧の海岸と学校の写真も掲載されている。箕輪下を含む本牧地区は、明治末から大正初期に人口の急増期を迎えており、多くの人が移り住んだと考えられる。関内地区に商店を構える商人はもちろんだが、関内地区の銀行や会社に勤めるホワイトカラー層も本牧線の沿線に多く居住した。

（前略）商家各位に稟す奇利を博するには新勃興地を撰はるべし箕輪下は元町と本牧町とに介立し交通は至便と風致の冠絶は久しからずして寸地を余さざるに至るべし此際形勝の地を占むれば猗頓の富は手に唾して得べし（後略）

なお、横浜電気鉄道は本業の鉄道（軌道）事業においても、線路を金沢・逗子・鎌倉方面までさらに延長することを計画（一部は着工）、積極的な拡大

経営をはかっていた。しかし、第二次世界大戦に起因する日本経済の混乱と重なり、会社の経営は苦境に追いやられてしまふ。1918（大正7）年、横浜土地株式会社を設立し、不動産事業を切り離す。そして、市内路面電車の経営も、運賃値上げの画策と従業員のストライキの頻発、それに対する市民の反発をきっかけにして、先述の通り横浜市に移管され、会社は消滅する。

（岡田 直）



付図「本牧箕輪下住宅経営地」



「十二天ノ海岸」



「本牧尋常高等小学校」



「弊社経営地其一」



「弊社経営地其二」



「本牧箕輪下住宅経営地全景」 ※キャプションは原文の通り。(以下同)

横浜電気鉄道に関する資料

資料名	作成者	年代	所蔵者
株主総会開催通知	横浜電気鉄道株式会社	1906(明治39)	神奈川県立公文書館
往復乗車券	横浜電気鉄道株式会社	1911(明治44)	横浜開港資料館
往復乗車券	横浜電気鉄道株式会社	1911(明治44)	横浜都市発展記念館
軌道特許・横浜市営 (*横浜電気鉄道が作成・提出した書類が綴じられる)	内閣鉄道院	1911(明治44)~	国立公文書館
新線路写真帖	横浜電気鉄道株式会社	1912(明治45)頃	横浜開港資料館
住宅地案内	横浜電気鉄道株式会社	大正初期	横浜都市発展記念館
乗換切符	(横浜電気鉄道株式会社)	1914(大正3)	横浜都市発展記念館
大典記念乗車券	(横浜電気鉄道株式会社)	1915(大正4)	横浜都市発展記念館
往復乗車券	横浜電気鉄道株式会社	1917(大正6)	横浜都市発展記念館
運輸週報	横浜電気鉄道株式会社	1917(大正6)~1919(大正8)	横浜市電保存館
第35,36,37,39回報告書	横浜電気鉄道株式会社	1919(大正8)~1921(大正10)	横浜開港資料館
横浜市内電車案内	横浜電気鉄道(株式会社)	1920(大正9)頃	長谷川弘和氏旧蔵・横浜都市発展記念館複写(*現物は所在不明)